

【報告3】

近代都市・丸の内の容貌

* 米山 勇

はじめに

どうも米山でございます。建築史の立場から丸の内の容貌についてお話しさせていただきます。

まずはじめに「丸の内」の定義であります。が、「広域丸の内」という言葉がありまして、現在の丸の内一〜三丁目、そして、大手町一、二丁目、さらに有楽町一、二丁目を含めた範囲を現代の丸の内ということが出来ます。これからお話しする内容も、そのような「広域丸の内」を対象地域として進めていきたいと思えます。

明治初期の様相

次に、丸の内の建築史についてお話ししていきます。明治初期の丸の内はどういう状況だったかという点、官公庁あるいは練兵場、そういったものが建ち並んでいたのです。これは「改正明細東京御絵図」(図1)という明治十六年(一八八三)の地図ですが、官公庁や軍の建物が並んでいたことがわかります。建築史家の陣内秀信さんもおっしゃっていることですが、これらの建物というのは旧大名藩邸を転用したものがほとんどでした。藩邸というのは面積が広くて、しかも勤番侍の長屋などがあつたために、元々兵営や練兵場などに転用しやすい性格を備えていました。そういうわけで、大

名屋敷の敷地がそのまま軍や官公庁の施設に転用されていたというのが明治初期の丸の内の姿です。

官公庁と擬洋風建築

大蔵省・内務省

まず、大蔵省・内務省が一緒になった建物(図2)、明治五年(一八七二)のものであります。明治五年ということは、今でいう建築家という職能はまだ生まれていない時代です。建築家が日本で初めて誕生するのは明治十二年(一八七九)ですが、この林忠恕(一八三五〜一八九三)という設計者は、居留地で外国人と接しながら見よう見まねで洋風の表現を学んだ人なのです。この建物は木造漆喰塗りの二階建てですが、それをあたかも石造りのように仕上げている。そして、窓が縦長だということも洋風の特徴です。西洋の建物はなぜ縦長になるのかというと、石やレンガを積んで作るために日本建築のような広い窓をとれないからなのです。逆に明治初期の大工棟梁や技師たちはその形を真似ました。木造だから横にいくらでも

* 都市歴史研究室助教授

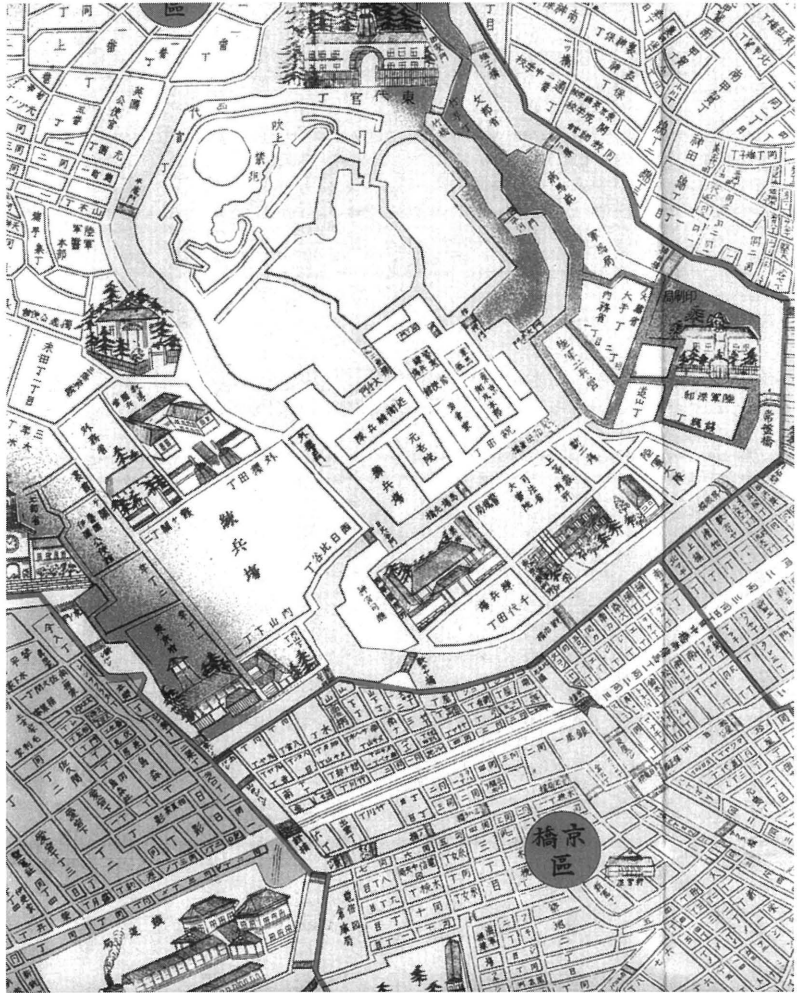


図1 明治16年の丸の内 『明治16年改正明細東京御絵図』(人文社)より転載



図2 大蔵省、内務省 林忠恕 明治5年(1872) [[明治大正建築写真聚覧』(日本建築学会 1936)より転載]
(以下特記のないものは同じ)

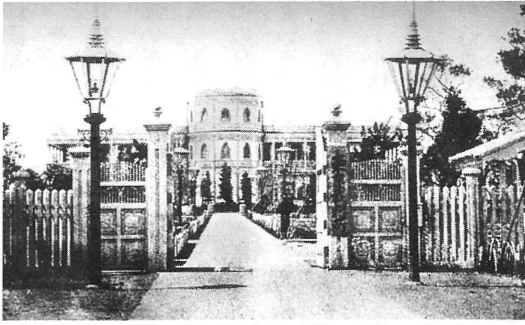


図3 東京裁判所 設計者不詳 明治7年(1874)

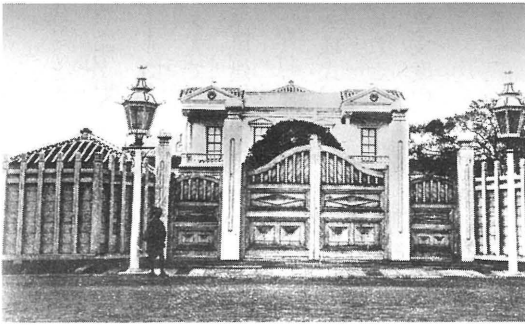


図4 元老院 工部省官繕局 明治8年(1875)

大きい窓をとれるのにわざわざ縦長にしている。それが明治初期の建物の特徴ですね。正式な西洋建築の教育を受けていないのですが、左右対称の全体像と、門の軸線に垂直に建物が建つという感覚はやっぱり洋風のものだと思います。その一方で、屋根を見ると伝統的な瓦屋根で、千鳥破風が両方につくという和風。典型的な明治初期の「擬洋風」建築です。

東京裁判所

大蔵省・内務省のすぐ後に東京裁判所(明治七・図3)という建物が建つのですが、これはユニークな建物ですね。やはり木造なの

ですけれども真中やや向かって左側になにやら不思議な十二角形状の塔が建っている。窓にはゴシックのようなんですがアーチがあるのですが、ちょっとイスラム的な感覚にも見える。明治初期の和洋折衷の建物の中でも最も面白いものの一つです。軒の上にチヨロンチヨロンといっぱいとんがったものが出てるのは、ゴシック様式の建物によく見られる装飾で、そういうものを目で学んでいるのですね。

元老院

この建物、元老院(図4)は明治八年(一八七五)に建ったもので、場所としては、江戸時代で言えば西の丸下の中にありました。門の形がユニークですね。これはオールヌーヴォー風とでも言いたいのですが、この時代でオールヌーヴォーは伝わってないと思うので、どちらかというと日本の「唐破風」ではないかと。唐破風というのはご存知の方も多いと思いますが、室町頃に発生して、桃山時代、江戸時代によく使われた屋根の形です。門に隠れて建物は見にくいですが、屋根の両側に三角形の部分があります。これは先ほどの大蔵省・内務省の「千鳥破風」とは違って、明らかにギリシャ神殿の破風(ペディメント)に倣ったものです。外観に複数のペディメントを配するのはルネサンス様式の手法ですが、元老院の設計者も外国人の建てたルネサンスの建物を見て、ヒントを得たのかもしれない。

印刷局

そして、ウォートルス（生没年不詳）とボアンヴィル（一八四九〜不詳）の設計による建物、印刷局（明治九・図5）。いわゆるお雇い外国人の二人の合作で、ウォートルスというのはアイルランド人、ボアンヴィルというのはフランス人です。これはやっぱり今までの日本人の「見よう見まね」の擬洋風建築と比べると本格的だなどという感じが感覚的におわかりいただけるのではないかと思えます。古典様式の系譜にあるルネサンス様式、とくにその中でもアンピール様式というスタイルなのですけれども、それをきちんと体得した外国人による建築。このような完成度の高い建物が、明治九年の時点で建っていたということです。



図5 印刷局 W.J.ウォートルス,C.A.C.ド・ボアンヴィル 明治9年(1876)



図6 大審院 工部省営繕局 明治10年(1877)

大審院

一方、工部省営繕局の中心人物として活躍した林忠恕が担当した大審院（図6）、明治十年（一八七七）の建築です。江戸時代でいえば大名小路というのでしょうか、今のまさに丸の内という地名にあたるころにあつた大審院。これなんかちよつと鹿鳴館を彷彿とさせますね。中央部分をせり出して、そしてバルコニーを設けて三連のアーチ、それを両開きにして人々がそこに出来るようにしている。けれども屋根は入母屋屋根という伝統的な形式ですね。洋の要素と和の要素が混在している擬洋風建築が、明治初期の丸の内を彩っていたわけです。

東京上等裁判所

同様に東京上等裁判所（明治十・図7）、これは設計者がわかりませんが、丸の内に建っておりまして。西洋の建物を自分なりに模倣しているのですが、屋根は入母屋ですし、窓下のところで縦の線がちよつと飛び出て、井桁のような形になっているあたりが怪しい。

農商務省

農商務省は大手町にあつた建物です（明治十四・図8）。農商務省は、後に農林省と商工省に分離することになります。先程、松尾先生のお話の中で「冠木門」という言葉がでしたが、この建物の場合は冠木門の冠木の部分を省略したような感じ。縦長窓の長さが

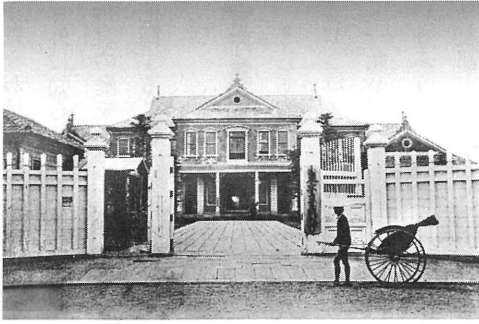


図7 東京上等裁判所 設計者不詳 明治10年(1877)



図8 農商務省 設計者不詳 明治14年(1881)



図9 鹿鳴館 J.コンドル 明治16年(1883)

目立ち、中央の大きな開口がきちんとしたアーチでない。洗練されたデザインとはいえないものですね。仕方がありません、何しろ誰も教えてくれないわけですから。

お雇い外国人と洋風の街並み

鹿鳴館

そうした中で、お雇い外国人—先程、ポアンヴィルやウォートルスという名前を出しましたけれども—ジョサイア・コンドル(一八五二—一九二〇)というイギリス人建築家が日本にやってくるわけです。彼の建築作品の中でもこの鹿鳴館(明治十六・図9)は最も有名なのではないのでしょうか。鹿鳴館が建っていた場所は現在では

内幸町ということになりますから、定義上は、本来は丸の内から外れるのですけれどもこの建物は非常に重要なものなのでご紹介しておきます。アーチが連続するルネサンス様式で、中央の小屋根がちよっと起りを持っていきますね。このへんはフランス風の感覚です。ちなみに軒下にある細かい「持送り」と呼ばれる部材が、当館に所蔵されております。ここで、注意していただきたいのは、洋風の建物だけれども庭は怪しい庭だという事ですね、和洋折衷なのです。燈籠が立っていて、池も松がここから生えていて、和風の雰囲気の色濃い。庭全体としては、和洋折衷であつたということがわかる。そして鹿鳴館の門は旧薩摩藩の装束屋敷門をそのまま転用しました。鹿鳴館といえば外交政策、欧化政策の象徴であつたと誰でもそ

う思うわけですが、その門が大名屋敷の転用であつたということは意外に知られていない。当館常設展示室の模型では、「門から和洋折衷の庭を通つて洋風の建物へ」という全体像を、鳥瞰的な視点で把握することができます。

官庁集中計画

そして明治二十一年（一八八八）、官庁集中計画という驚異的なプロジェクトが発表されます。これは、外務卿の井上馨（一八三六〜一九一五）を中心とする明治政府がパリのような都市を造ろうというふうに考え、そして何十人もの職人をドイツに「何でパリのよくな都市を造るのにドイツなのかはわからないのですけど」送るわ

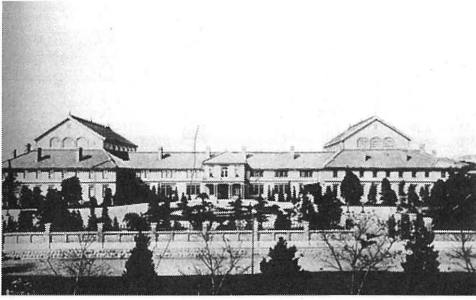


図10 帝国議会仮議事堂 A.ステヒミュラー、吉井茂則 明治23年（1890）



図11 司法省 H.エンデ、W.ベックマン他 明治28年（1895）

けですね。それでドイツから来日したのがエンデ（一八二九〜一九〇七）とベックマン（一八三二〜一九〇二）というドイツ人なのです。二つの大通りが合体して「日本大通り」となって新宮殿（宮城）に至るといふ壮大な都市計画。これが実践されていれば、丸の内というのは恐ろしく整った都市景観を持つ街になつたはずなのですが、結果としてほとんど実現しませんでした。これは何故かという、何といつても財政難というのが一番大きかつたのですけれども、それと日比谷地域の地盤が非常に悪い。日比谷というのは近世初頭に埋め立てられた地域ですから、それ以前は入江だったわけで、今でも日比谷の建物というのは徐々に沈んでいっているものがあります。そういうわけでこの計画はほとんど実現されなくて、実際に建つたのは、帝国議会仮議事堂（明治二三・図10）、司法省（現法務省・明治二八・図11）、そして東京裁判所（明治二九・図12）という三つだけ。そのうち唯一現存している法務省は、明治の赤レンガ建築としては丸の内唯一といえますから非常に貴重ですね。

東京府庁

妻木頼黄（一八五九〜一九一六）の東京府庁（明治二七・図13）。この人の名前は「ツマキヨリナカ」と読みます、ヨリナカ。この人の名前覚えておいてください。妻木は、東京駅を設計した辰野金吾（一八五四〜一九一九）の宿命のライバルだった人ですね。辰野金吾というのは日本最初の建築家の一人でコンドルの愛弟子なのですが、妻木頼黄はコンドルの弟子にはならずドイツに行つてしま



図12 東京裁判所 エンデ、ベックマン他 明治29年(1896)



図13 東京府庁 妻木頼黄 明治27年(1894)

のですね。ですから彼の建築は非常にドイツ的です。例えば、中央屋根上の部分は「ランタン」というのですが、このようなランタンをもった建物はドイツ・オーストリアに行くときとたくさん見ることができます。こういったデザインというのは、当時はイギリス流が主流でしたから非常に珍しかった。

一丁ロンドン

そして、いよいよ三菱の登場です。近代丸の内の歴史とえば三菱の歴史と言っても過言ではありません。明治二十年代になると、丸の内にあった軍施設が移転する為に敷地を売却しようとしてしました。それを誰が買い取るかということで、三井家と渋沢栄一(一八

四〇〜一九三二)が手を組んで三菱と綱引きをやったのですね。それで、勝ったのが三菱財閥二代目の岩崎弥之助(一八五一〜一九〇八)で、丸の内の広大な八五、〇〇〇坪の軍用地が三菱に払い下げられる訳です。三菱は当初から、ジョサイア・コンドルを建築顧問として雇い入れて、丸の内を世界にも負けない美しい街にしようという目論んでいました。それがこの【一丁ロンドン】(図14)ですね。百メートル位一丁の長さで、ロンドンのような美しい街ということで「一丁ロンドン」と言われたのです。「三菱一号館」(明治二七)を皮切りに二号館、三号館というふうに住って行く。しかしこれらの建物はいま、一つも残っておりません。三菱一号館は戦後まで残っていたのですが、残念ながら一九七八年(昭和五十三)に取り壊されました。

大正期の丸の内

帝国劇場

帝国劇場は今でもありますが、この写真(図15)は明治四四年に建った前身建物です。この帝国劇場は、ある意味、「明治的な建築」から「大正的な建築」へと移行を率直に示した建物といえます。それはどういうことかという、外観だけ見てもわからないのですけれども、この帝国劇場は多くの一般の人々がここで観劇をするために造られたということです。もちろんお金は多少かさみますから、一定の収入がない人びとには困難でしたが、ともかくお金を払って切符を買えば、この夢の空間―日本初の西洋式劇場―を堪能



図14 一丁ロンドン コンドル、曾禰 達蔵
明治27年（1894）（絵葉書「東京名所丸
の内馬場先門通り」〈90003523〉）



図15 帝国劇場 横河民輔 明治44年（1911）

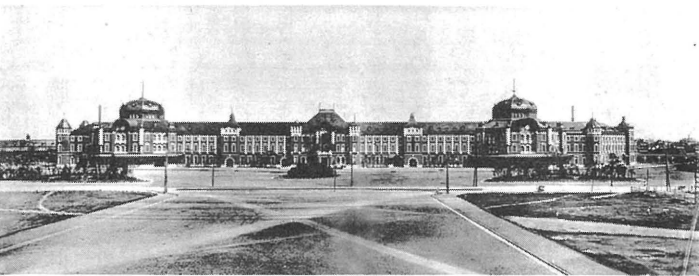


図16 中央停車場（東京駅） 辰野金吾 大正3年（1914）

東京銀行集会所
そしてこのような美しい建物（図17）も大正時代になると建ってくる。スカイラインが美しいですね。このようなスカイラインの美しさというのが、東京銀行集会所（大正五）の大きな魅力のひとつです。そして左右非対称でありながら、全体的にある均衡を保っている。これはもう名手でなければ出来ないことで、この横河工務所というのは横河民輔（一八六四～一九四五）が作った事務所ですが、その最優秀の部下が松井貴太郎（一八八三～一九六二

することが出来たのです。それまでの、つまり明治時代の建築家が力を注いだ建物というのは、国家の為の建築か、あるいは皇族や上流階級の為の邸宅でした。この帝劇は、そうではなくて一般市民の為の建築である。先程の官庁集中計画に象徴されるような俯瞰的視点から、市民の視点へという「主体」の転換が、明治から大正へという転換を投影していると思うのですね。

中央停車場（東京駅）

一方、辰野金吾は「明治的」な建築を造り続けます。その集大成といえるのがこの中央停車場、東京駅（大正三）です。これはものすごく長い駅ですね。長さ世界一で、四四三メートルもあります。

ご承知の通り、当初はこの写真（図16）のように王冠のようなドームを載っていたのですが戦災で焼けてしましまして、今では寄せ棟のような屋根になっております。重要なのはこの東京駅は非常に耐震性を考慮しているということです。これは意外に知られていないことですが、東京駅は「鉄骨煉瓦造」という構造なのです。鉄骨を組んで、その外側に煉瓦を一層ほど積んで、さらにタイルのような薄い煉瓦を張っているのです。東京駅の外壁というのは実は煉瓦というよりはタイル張りだということです。



図17 東京銀行集会所 横河工務所(松井貴太郎) 大正5年(1916)



図18 日本工業倶楽部 横河工務所(松井貴太郎) 大正9年(1920) 撮影:米山勇



図19 東京海上ビル(左)曾禰中條建築事務所 大正7年(1918)と郵船ビル(右)同 大正12年(1923)(給業書「東京名所 行幸道路より右 郵船ビル 左 海上ビル 正面 東京駅」<91221767>)



図20 丸の内ビルディング 三菱地所部(桜井小太郎) 大正12年(1923)

という建築家だったのですね。松井が担当した東京銀行集会所は、丸の内に新鮮な潤いを与えました。現在、この美しい建物は、外観の皮一枚だけが保存されています。これは明らかに失敗と言わざるを得ませんが、「失敗は成功のもと」という意味では、今後の近代建築保存のための糧として生かされれば、と思います。

日本工業倶楽部

これもまた松井貴太郎の作品です(大正九・図18)。松井は、いろんなスタイルを実に見事にこなす名手でした。シンメトリーだけでも軽やか。ただ中央の部分だけが何故重々しいのかというと、皇族専用の入口だからです。屋上の彫像は男性がハンマー、女性が糸車を持っています。これは当時の二大工業であった石炭と紡績を示し

ています。日本「工業」倶楽部ということで非常にユーモア精神に溢れた建築です。これも部分保存されておりませんが、かつての東京銀行集会所のような事例に比べ、はるかに進歩したように感じます。

大規模オフィスビルの時代

そして大正時代の後期に顕著な傾向として大規模オフィスビルというのが建てられていくことが挙げられます(図19)。これはアメリカの大きな影響です。デザイン的な特徴としては、一番下の部分(基壇)と最上部(アチック階)だけを差異化して、あとの階は全部一緒ということ。てっぺんと一番下を除けばあとは同じ図面で行うわけですから合理的ですね。しかも建物の軽量化や施工の短期化

など、徹底的な合理化が図られている。アメリカ式の合理主義と先端技術が日本に押し寄せ、丸の内で実践される。かつては一丁ロンドンと言われていた丸の内が、「二丁ニューヨーク」と呼ばれるようになったのもこの時代です。

丸ノ内ビルディング

そうしたアメリカ式大規模オフィスビルの代表格がこの丸ノ内ビルディング（大正十二・図20）ですね。外観は、定例に倣って一番下の部分とつぺんだけちよつとデザインを変えてあとは同じ。ただ、丸ビルがただの大規模オフィスビルに終わらなかつたところは、ビルの一階部分に商店街を設けたということですね。それまでオフィスビルというのは借りた人しか入れなかつたけれども、この丸ビルは関係者以外の人でも自由に出入りできる初めてのオフィスビルでした。人びとに開かれた都市づくりを目指した当時の三菱の気概が感じられる建物です。今は三十六階建ての超高層ビルに置き変わつてしまいましたが、それを新丸ビルと呼ぶのはやめて下さい。新丸ビルという建物は、丸ビルの向かいに建っているんですね。じゃあ何て呼べばいいのかというと「新しい丸ビル」と呼んで下さい。もつとも新丸ビルの方も平成十九年（二〇〇七）までに建て替えられるそうですが、その時は「新しい新丸ビル」と言えばいいのです。

震災復興期と戦前 三信ビル

丸ビルが建つた大正十二年（一九二三）に、関東大震災が起こります。これによって、煉瓦造や石造の建物は地震に弱いことが実証される。ですから、大正十三年（一九二四）以降の建物が東京に建つていたら、まず煉瓦造でも石造でもないと思つてください。そのように見えるものはほとんどの場合、鉄筋コンクリート造に煉瓦のようなタイルを張っているのです。

震災復興期の建築としては、まず三信ビル（昭和四・図21）という名作があります。これもやっぱり横河工務所で松井貴太郎の担当ですね。またもや松井貴太郎なのですけれども、他の作品に負けず劣らぬいい建物です。おそらくここで定義する丸の内地区に建つオフィスビルの中で、随一の建物といつてもいいと思います。外観のデザインも非常に多彩で華やかなものでありますし、それ以上に、まさにうなぎの寝床という言葉に相応しい九十メートルも続く大アーケード、それが二層吹き抜けのたいへん豊かな空間になっているのです。いつまでも残つてもらいたい最高のオフィスビルです（注：その後、取り壊しが決定した）。

東京中央郵便局

昭和六年（一九三一）の東京中央郵便局（図22）。東京駅の丸の内南口を出ると、すぐ左前に建っている建物です。これはモダンの極致ですね。昭和六年の時点でこれだけの大きな窓というのが、ま



図21 三信ビル 横河工務所(松井貴太郎)
昭和4年(1929) 撮影:米山勇

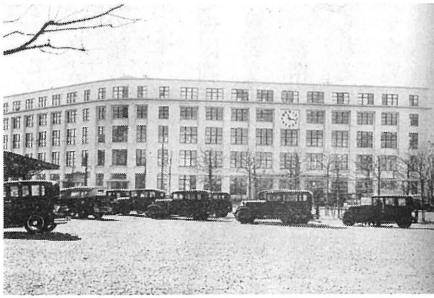


図22 東京中央郵便局 通信省営繕課(吉田鉄郎) 昭和6年(1931)



図23 日清生命館 佐藤功一 昭和7年(1932) <早稲田大学所蔵>

明治生命館
そして昭和九年(一九三四年)になると、日本の様式建築の集大成とも言える明治生命館(図24)が建ち上がるのですが、

が、三連窓の持つ彫りの深さやスカイラインが失われてしまっているのが残念です。

ず先進的です。いかに合理的に明るい環境を作るかという考え。当時の通信省(後の郵政省、今の日本郵政公社ですが)の営繕課というののもう超モダニスト揃いでした。東京中央郵便局を設計した吉田鉄郎(一八九四〜一九五六)という人もその内の一人で、他に山田守(一八九四〜一九六六)、山口文象(一九〇二〜七八)という建築家たちがいました。吉田鉄郎は特に郵便局建築で非常にモダンな設計をした建築家で、大阪中央郵便局(昭和十四)という建物も彼の設計です。東京中央郵便局は、桂離宮や伊勢神宮を礼賛したドイツ人建築家ブルーノ・タウト(一八八〇〜一九三八)の絶賛を受けました。そして日本のモダニズム建築をリードしたアントニン・レーモンド(一八八八〜一九七六)というチェコ生まれのアメリカ

人建築家もまた、アメリカにわざわざ電話を入れて、日本に、東京に凄いものが建つたと報告せずにいられたという話があります。「最高の簡素さの中に最高の美がある」、つまり柱・梁という構造がそのまま露出される構成に、レーモンドやタウトは欧米のモダニズムが理想としているのと同質の美を見いだしたのですね。

日清生命館

大手町に今「残っている」といえば残っているのが日清生命館(昭和七・図23)。佐藤功一(一八七八〜一九四一)という早稲田の大隈講堂(昭和二)や日比谷公会堂(昭和四)の設計で知られる建築家の作品で、スカイラインが美しい建物ですね。時計塔を強調したコーナー部分、三連窓など、かすかに様式的な香りを残しながら、装飾を抑えて近代化を図っています。この建物も現在は、東京銀行集会所と同様に部分保存がなされています(大手町野村ビル)



図24 明治生命館 岡田信一郎 昭和9年(1934) 撮影:志岐祐一

に、余剰の敷地に従来より高い建物を建てるのが出来ました。これは建物の保存を促進する上で非常にいい制度だと思えます。これまで、高いビルを建てるためにはどうしても大きな敷地を確保しなければならず、そのために皮一枚の保存にならざるを得ないケースが多々あったからです。

帝室林野局庁舎

これは帝室林野局庁舎(図25)、昭和十二年(一九三七)に建てら

これを設計した岡田信一郎(一八八三〜一九三二)は歌舞伎座(大正十三)の設計者でもありませんし、いろんな様式をこなした名手の中のおりまして、これは実は意義深いのです。何故かと言うと、東京都が制定した「重要文化財特別型特定街区制度」の適用を受けて建てられているからです。この制度は、重要文化財の建物を残すかわりに容積率を緩和するというものです。容積率というのは敷地面積に対してどれだけの容積の建物を建てられるかということです。この明治生命館の場合、昭和九年の建物を重要文化財として残すかわりに、

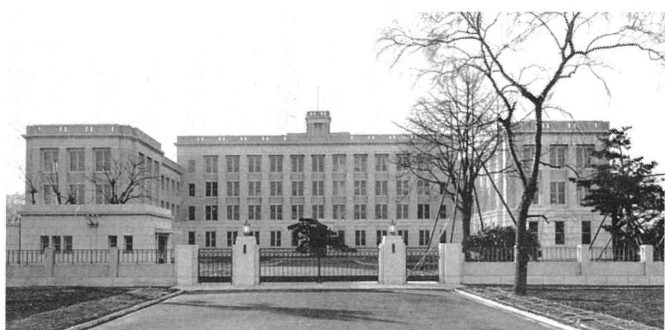


図25 帝室村野局庁舎 佐藤功一 昭和12年(1937)

〈前掲『佐藤功一博士』より転載〉

造られていた。こういう魅力的な庁舎がもつと建てられてもよいのではないかと思えますね。ちなみにこの建物が壊された後の敷地に建ったのがパレスホテルです。

第一生命相互館

渡辺仁・松本興作設計の第一生命相互館(昭和十三)は先程の明治生命館に似たプロポーションをもった建物ですが、決定的な違いは装飾が一切剥ぎ取られていることです。様式建築の「骨格」を残しつつ、様式の中核である「装飾」を捨象してし

れた官公庁建築の傑作ですね。ルネサンスをモダン化した外觀も非常に端正ですが、面白いのは平面図(図26)です。一見するとただのコの字型の間取りに見えますが、廊下に注目すると「偏って」いるのがわかります。これは何故かと言うと上が南で左が東だから、このように廊下を寄せることによって、全部の部屋が南東からの光を得ることができるということです。つまり、この帝室林野局庁舎は庁舎建築でありながら住宅的な過ごし易さというものを考えて

まう。それにより、「様式」に依拠する時代の終わりを告げているのだと思います。この建物は現在、隣接していた農林中央金庫（昭和八）と合体した形で、「DNタワー21」（図27）というビルになっていますが、なかなかうまい再生の事例だと思います。

戦後〜現代

日活国際会館

どんどん時代は下ります。この日比谷パークビル（昭和二十七・図28）は潜函工法せんかんこうほうという施工法で建てられたのが大きな特徴です。

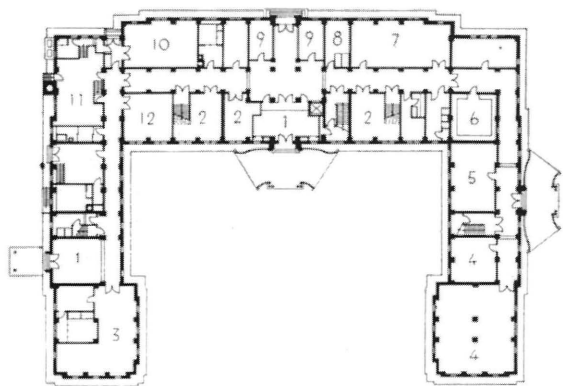


図26 帝室羽野局庁舎平面図 前掲『佐藤功一博士』より転載

潜函工法は、建物の地下を作ってから徐々にその箱ごと埋めていくというもので、日比谷のように地盤の弱い土地でもつようと開発された工法です。ちなみにこの建物はかつて「日活国際会館」と呼ばれ、石原裕次郎（一九三四〜八七）が主演した映画『霧笛が俺を呼んでいる』の舞台にもなりました（注：その後、取り壊された）。

日生劇場（日本生命日比谷ビル）

村野藤吾むらのとうご（一八九一〜一九八四）の日生劇場（昭和三十八・図29）。有楽町一丁目建っている現役の建物で、外から見ると石造のようですが、実際は鉄骨鉄筋コンクリート造に石のパネルを張っています。これはすごくお金がかかります。それから内部のホールは天井がなんと阿古屋貝張りです。そして壁面は、ガラスモザイク。村野藤吾は関西出身の建築家なのですが、芸術的な才覚に加え、社会的な能力にも長けていた人でした。施主にお金を出させるといっても、やはり建築家の重要な能力のひとつなのですね。



図27 DNタワー21 K.O-4、清水建設
平成7年（1995） 撮影：米山勇



図28 日活国際会館 竹中工務店 昭和27年(1952) 撮影:村沢文雄



図29 日生劇場 村野藤吾 昭和38年(1963) 撮影:米山勇

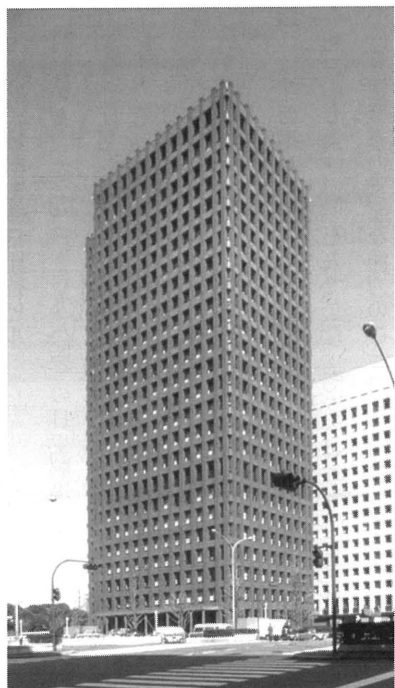


図30 東京海上ビルディング 前川國雄 昭和49(1974) 撮影:米山勇

東京海上ビルディング

そして丸の内の景観を語る上で欠かせないのが、前川國男(まえがくに お)(一九〇五〜八六)設計の東京海上ビルディング(昭和四十九・図30)。これが何故欠かせないのかといういわゆる美観論争を呼び起こした建物だからです。建築申請から認可が下りるまで十年もかかった上に、当初三十階構想だったのが二十五階になってしまったのですね。皇居のほとりに三十階の超高層ビルなどまかりならんということで、十年かけてようやく許可が下りたと。その間に霞ヶ関ビルが建ってしまった。「日本初の超高層」の地位を奪われてしまった気の毒な建物なのです。ここがいいんですね、この角の部分が。柱が二本、人ひとりも入れない猫一匹も通れないほどの隙間がある(図31)。

あえて一本にまとめないところが前川國男らしいこだわりです。

東京国際フォーラム

これはお馴染みの東京国際フォーラム(平成六・図32)ですね。ラファエル・ヴィニョリ(一九四四〜)というアメリカ人建築家の作品。いろいろと言われる建物ではありますが、とても優れた空間だと思えます。特にこのアトリウムですね。夜になるとあたかも空に浮かぶ船のように鉄骨が浮かび上がる。非常に美しい建築です。

おわりに

丸の内は今、急速な再開発の渦中にあります(図33)。開発を進める際には、「歴史に学ぶ」という姿勢をぜひ持ち続けてほしいと思います。近く三菱一号館を復元するという計画が発表されています。



図31 東京海上ビル隅部詳細 撮影：米山勇



図32 東京国際フォーラム
R.ヴィニヨリ 平成6
年(1994) 撮影：米山勇



図33 丸の内OAZO(中央奥) 三菱
地所設計、日建設計、山下設計
平成16年(2004) 撮影：小澤弘

すが、それだけに終わらず、「二丁ロンドン」以来の伝統を感じさせる美しい街として繁栄していくことを願ってやみません。
以上でございます。ありがとうございます。